

# 『枕草子』における漢語の表現

## ——「三条の宮におはしますころ」の章段を中心に——

総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本文学研究専攻 張 培華

長保二（一〇〇〇）年二月二十五日、藤原彰子（九八八―一〇七四）は、新たな中宮となり、元の中宮定子（九七七―一〇〇一）は、皇后に代わった。同年十二月十六日、皇后定子は三番目の皇女を出産の後、まもなく崩御した。わずか二十五歳（『日本紀略』）、あるいは二十四歳（『権記』）であった。

この年、五月五日の端午節の頃、皇女姫宮（五歳）の脩子内親王（長徳二（九九六）年御生誕）、皇子若宮（二歳）の敦康親王（長保元（九九九）年御生誕）のため、菖蒲の輿、葉玉などが贈られたものの中に、「青ざし」という物があり、清少納言はそれを取って艶なる蓋に載せて、皇后定子に献上した。懐妊三ヶ月の皇后定子は、清少納言の心意を受け取って、すばやく一首の和歌「みな人の花や蝶やといそぐ日もわが心をば君ぞ知りける」と詠んだのである。そして清少納言は「いとめでたし」と賛美した。

該当する章段の年次は明確で、重要な章段と認められ、さまざまな視点から論じられてきた。しかし、まだ幾つかの問題が残される。

例えば、清少納言が取った「青ざし」という物については、上代から平安までの作品にはまったく見られないため、いまだに定説を見ず、『食物知新』に関わる語彙との指摘はあるものの、適切であるとはいえない。また、清少納言は「青ざし」を硯の蓋にのせて、皇后定子に献上した。なぜ清少納言は「青ざし」を定子に奉ったのか。いったい「青ざし」という物は、具体的にどのようなものなのか。さらに皇后定子は「青ざし」を受けて、すばやく「花や蝶や」を歌に読み込んでいるが、万葉から平安まで「蝶」を和歌に詠むことは極めて少ない。いったい皇后定子は何の比喩を念頭におかれているのか。

本稿では、これらの二点を中心として、漢語、漢文学の影響を軸に据えて、改めて考えてみたい。

キーワード：五月五日 端午節 青ざし 花や蝶や 白氏文集 感傷詩

はじめに

一、「青ざし」について

二、一 問題の所在

二、二 「青ざし」の実態

二、三 「青ざし」と「青刺」

二、四 薬草としての青刺の薊

二、「花や蝶や」について

二、一 問題の所在

二、二 「花や蝶や」の先行の解釈

二、三 「花や蝶や」と和漢文学の表現

二、四 「萎花蝶飛去」の寓意

おわりに

## はじめに

『枕草子』における漢文学との関連性については、すでにさまざまな指摘が積み重ねられてきた。しかし一見すると和文のような表現であっても漢語に着目すると、まだ幾つかの章段に、漢文学との関係が見えてくることは少なくない。例えば、「三条の宮におはしますころ」の章段は、そのように考えられるであろう。

考察に際して、まず、該当する三巻本と能因本の本文を取り上げたい。三巻本の本文は、陽明文庫蔵『枕草子』底本としての『新編日本古典文学全集』により、能因本の本文は、学習院大学蔵『枕草子』底本としての『日本古典文学全集』に拠る。傍線、括弧などは筆者が施した<sup>(1)</sup>。

## 三巻本「二二三段」

三条の宮におはしますころ、五日の菖蒲の輿など持てまゐり、薬玉まゐらせなぞす。若き人々、御匣殿など薬玉して、姫宮、若宮につけたてまつらせたまふ。いとをかしき薬玉ども、ほかよりまゐらせたるに、青ざしといふ物を、持て来たるを、青き薄様を、艶なる硯の蓋に敷きて、「これ籬越しに候へば」とてまゐらせたれば、

〔定子〕 みな人の花や蝶やといそぐ日もわが心をば君ぞ知りけるこの紙の端を引き破らせたまひて書かせたまへる、いとめでたし。

(二三五頁)

## 能因本「二一六段」

四条ノ宮におはしますころ、五日の菖蒲の輿など持ちてまゐり、薬玉まゐらせなぞ、若き人々、御匣殿など薬玉して、姫宮、若宮につけさせたてまつり、いとをかしき薬玉、ほかよりもまゐらせたるに、青ざしといふ物を、人の持て来たる、青き薄様を、艶なる硯の蓋に敷きて、「これ籬越しに候へば」とて、まゐらせたれば、

〔定子〕 みな人の花や蝶やといそぐ日もわがころをば君ぞ知りけると、紙の端を破りて書かせたまへるも、いとめでたし。

(二二六〇頁)

両系統の写本を比べてみると、右の翻刻には、若干違う表記が見える。例えば、三巻本において「薬玉」の「薬」は漢字でなく、「くす」であり、能因本において定子の和歌には、「わがころ」の「ころ」は仮名でなく、漢字「心」であった。また三巻本と能因本の異文にも見られる。例えば、冒頭文では、三巻本は「三条」であり、能因本は「四条」である。ただし、本段の趣旨である、一条天皇と中宮定子の皇女「姫宮」（脩子内親王）と皇子「若宮」（敦康親王）のために、菖蒲、薬玉などが贈ら

れた場面の内容は、いずれも一致している。

三巻本の勘物<sup>(2)</sup>「長保元年八月九日自式御曹司移生昌三条宅、二年五月」によると、本段冒頭の「五日」は、長保二(一〇〇〇)年五月であった。また脩子内親王が長徳二(九九六)年十二月十六日に誕生したこと(『日本紀略』)、敦康親王が、長保元(九九九)年十一月六日に誕生したこと(『日本紀略』)を照らし合わせると、本段の年次は勘物の記載通り、長保二(一〇〇〇)年五月五日のことであることは間違いないだろう。

この年、二月二十五日、藤原彰子は新中宮となり、元中宮の定子は皇后に代わった<sup>(3)</sup>。本段に関する歴史的背景は、当時の皇后定子の心情および『枕草子』を理解するために、重要な章段と認識されており、これまでも色々な視点から論じられてきた<sup>(4)</sup>。

しかし、それでも未解決の問題が、残されているといえよう。たとえば①「青ざし」は具体的にどのような物か。②上句「みな人の花や蝶や」といそぐ日も」にある「花や蝶や」については、皇后定子は何を念頭に置いたものか、等である。

ただし、ここでは、②皇后定子の和歌の下句「わが心をば君ぞ知りける」の「君」は、諸説があり、また加藤盤齋『清少納言枕双紙抄』本文には、「天」と見え、この点については、川瀬一馬氏の「この歌の「君」の字、盤齋抄には「天」とあり、天は一条天皇をさすと解している」(川瀬一馬『枕草子』下講談社・二〇三頁)解説に従う。さらに「君」としても、『日本国語大辞典』の解釈したように、「一国の君主。天皇。天子。」(二六四頁)と考え、定子が自分の心情を理解してくれる一条天皇に対して、感謝の気持を表すと考える<sup>(5)</sup>ことを前提とする。

この二点については、先行研究の解釈でも揺れているようで、いまだ定説をみていない。そこで、本稿では、まず「菖蒲」、「薬玉」、「輿」、「艶」、「硯」、「蓋」、「蝶」などの、中国渡来の五月五日の端午節の風物に関わ

る漢語から連想される事項を、改めて考え、とりわけ「青ざし」、「花や蝶や」の表現を分析することを通じて、清少納言と中宮定子との応答の意味を考察したい。

## 一・「青ざし」について

### 一・一 問題の所在

「青ざし」は、平安時代では、『枕草子』にしか見えず、三巻本写本には(陽明文庫本)「あをさし」と表記されるが、歴代の翻刻を纏めてみると次のようになる。

- ① 「あをざし」 加藤盤齋『清少納言枕双紙抄』(延宝二(一六七四)年五月)
- ② 「青刺」 北村季吟『春曙抄』(延宝二(一六七四)年七月)
- ③ 「あをさし」 武藤元信『枕草紙通釈』(有朋堂書店、一九一一)
- ④ 「あをざし」 金子元臣『枕草子評釈』(明治書院、一九二一、一九二四)
- ⑤ 「青ざし」 池田亀鑑『全講枕草子』(至文堂、一九五六、一九五七)
- ⑥ 「青刺」 岸上慎二『校訂三巻本枕草子』(武蔵野書院、一九六一)
- ⑦ 「青ざし」 松尾聰・永井和子『枕草子』(小学館、一九七四)
- ⑧ 「青稜子」 萩谷朴『枕草子』(新潮社、一九七七)
- ⑨ 「青ざし」 石田穰二『新版枕草子』(角川書店、一九八〇)
- ⑩ 「青刺」 田中重太郎『枕草子全注釈』(角川書店、一九八三)
- ⑪ 「あをざし」 萩谷朴『枕草子解環』(同朋舎、一九八一、一九八三)
- ⑫ 「初熟麦」 増田繁夫『枕草子』(和泉書院、一九八七)

⑬ 「青ざし」 渡辺実『枕草子』（岩波書店、一九九一）

⑭ 「青ざし」 津島知明・中島和歌子『新編枕草子』（あうふう、二〇一〇）

服食。

5 『枕草子』（前掲⑭番）

青麦粉製の唐菓子。「初熟麦」<sup>アヲザシ</sup>（書言字考節用集）、「胃を平かにし氣を益す」（食物知新）。

（二三五頁）

これらを大別すると、「あをざし」（①③④⑪）、「青刺」（②⑥⑩）、「青ざし」（⑤⑦⑨⑬⑭）が最も多く、他に「青稜子」（⑧）と「初熟麦」（⑫）の五種にまとめられよう。そのうち、「青刺」については後述するが、これは漢語である可能性が高い。そして最も多い表記は、「青ざし」である。

では、この「青ざし」は、どのような物であろうか。前述の諸本から代表的な解釈を取り上げてみよう。

1 『枕草子』「新日本古典文学大系」（前掲⑬番）

青麦をついて作った菓子

（二六三頁）

2 『枕草子』「日本古典文学全集」（前掲⑦番）

青麦の粉で作った菓子、という。

（三五八頁）

3 『枕草子』「新潮日本古典集成」（前掲⑧番）

『食物知新』に「初熟麦（和制） 積名青稜子（和名アヲザシ）  
取<sup>ツテ</sup>「初熟麦青者」<sup>ノ</sup>春<sup>キョ</sup> 食<sup>ク</sup>。故名<sup>ニツク</sup>。氣味鹹<sup>カラク</sup>温<sup>ニシテシ</sup>。無<sup>シ</sup>「毒」。平<sup>たひら</sup>。胃<sup>レ</sup>益<sup>ス</sup>氣<sup>ヲ</sup>」とある。当時皇后は妊娠三カ月、悪阻<sup>つわり</sup>の劇しい時期で、このような目先の変わった、胃に受けつけやすい食物を献じた人がいたものか。」

（一三五頁）

4 『枕草子』（前掲⑫番）

青麦の粉製の細長い形の菓子。「初熟麦（ザシ）」<sup>アヲザシ</sup>（書言字考節用、

（一八三頁）

1と2は、いずれも「青麦」で作った「菓子」と解釈し、3には、「菓子」と明記はされないが、『食物知新』から、「初熟麦」による「青麦」と同種と考える。また4は、3と同じ「初熟麦」と記し、ただ『食物知新』ではなく、『書言字考節用』を引く。5も、3、4と同じように、『書言字考節用集』や『食物知新』を援用したものである。

しかし、3、4、5に指摘された『書言字考節用集』と『食物知新』という辞書の書物は、いずれも江戸の出版物で、前者の成立は、元禄一一（一六九八）年、後者は、享保一一（一七二六）年であったように、平安時代のものを考える際に、同列として扱えないだろう。

また、1～5までの「青麦」、「初熟麦」を採る説は、次に示す通り、江戸時代の注釈に見える。

6 『清少納言枕双紙抄』（前掲①番）

【あをざし】とは、今の世も、青麦の芽にてする也。今日の御祝儀の薬玉などに取そえ、姫宮若宮を祝ひ奉りて、捧る成べし<sup>⑥</sup>。

7 北村季吟『枕草子春曙抄』（前掲②番）

青麦にて調子たる菓子なり<sup>⑦</sup>。

6 盤扇は「青麦の芽」、7 季吟は、「青麦の菓子」とする。6、7は、

いずれも「青麦」を材料としており、現在の諸注に引き継がれる。

近年は、「青ざし」が、「青麦で作った菓子」と断定された観もある<sup>(8)</sup>が、今なお疑問も出されている。例えば、田畑千恵子（田畑、二〇〇一）氏は、「その詳細はわかっていない<sup>(9)</sup>」と疑義を呈し、藤本宗利<sup>(10)</sup>（藤本、二〇〇二）氏や山田利博（山田、二〇〇三）氏も、実体が必ずしも明らかでないこと<sup>(11)</sup>を問題としているようにである。こうした疑問は、今も閑過されるべきではないであろう。本稿では、その問題について、五月五日の端午節の風物に着目し、本草資料の点から、一つの試案を提示したい。

## 一・二 「青ざし」の実態

まず、従来の説にあるように、「青麦」で作った「菓子」は、五月五日にあるものなのかを確認しておく。たとえば『角川古語大辞典』では、

あをむぎ【青麦】

名 まだ熟していないで色の青い麦（むぎ）。『毛吹・二』には「四月：青麦」とあり、季語、夏。『年浪草』には「今式に曰、青麦は三月なり」とあり、春の季語となる。「なは手を下りて青麦の出来（＝季語、春）」『炭俵・上』

と、「青麦」を「三月」と「四月」の物とする。当時の暦の宣明暦に従えば、長保二年五月五日（辛巳）は、ユリウス暦一〇〇〇年六月九日にあたり、また『大日本百科事典』には、「青麦 あおむぎ 麦青むともいふ。寒いうちに芽を出した麦は、春暖の訪れに力強く生長する。」（小学館、一九六七・七二頁）と記されている。

このことから、六月に「青麦」があるとは考えにくいであろう。では、本章段の五月五日には、青麦以外に、青々とした風物として、

何があるのだろうか。確認のため、『枕草子』における数箇所の「五月」に関する描写を示してみよう。（本文は『新編日本古典文学全集』による）

### ① 第三七段「節は」

節は、五月にしく月はなし。菖蒲、蓬などのかをりあひたる、いみじうをかし。

（八九頁）

### ② 第二〇七段「五月ばかりなどに山里にありく」

五月ばかりなどに山里にありく、いとをかし。草葉も水もいと青く見えわたりたるに、上はつれなくて、草生ひしげりたるを、ながながと、たたざまにいけば、下はえならざりける水の、深くはあらねど、人などの歩むに、走りあがりたる、いとをかし。

（三四六頁）

### ③ 第二〇九段「五月四日の夕つ方」

五月四日の夕つ方、青き草おほく、いとうるはしく切りて、左右になひて、赤衣着たる男の行くこそ、をかしけれ。

（三四八頁）

①は、五月の節会を最上とし、菖蒲、蓬などの香に深い興味を感じと言い、②は、五月頃、山里歩きの興を述べ、草もまばらな山の上方と、草が盛茂するコントラストや、水辺の風情をたたえている、③は、端午節の前日の「五月四日」の夕方に、赤い衣を着た五位の官人達が、青き草を束ねて担いで行く宮廷の情景に興味を感じている。

ここで留意したいのは、「青き草」を諸注は「菖蒲」と解釈する<sup>(12)</sup>が、蓬や別の青い草も「おほく」あったと考えられることである。

例えば、平安中期に惟宗公方が編纂した『本朝月令』五月五日に関する記事には、

菖蒲蓬物盛<sup>二</sup>一興<sup>一</sup> (13)

と、菖蒲、蓬が大量に盛られることが述べられ、また、『小右記』「治安三年」(一〇二三) 五月四日の条では、

東宮庁進菖蒲蓬等 (14)

と、菖蒲、蓬等<sup>一</sup>と他にも進上されるものがあつたことが記されている。

また、本章段でも、「五日の菖蒲の輿<sup>こし</sup>など持<sup>も</sup>(ち)てまゐり」(「一」)の中の部分は能因本のみ本文)と、「など」が記されていることや、異本表記ではあるが、「薬玉(ども)」(「一」)の中の部分は三卷本のみ本文)と他のもの一緒に進上されたことと記されていることも考え合せると、「青ざし」の正体を考えるヒントとして、五月五日の菖蒲のように雑給料として、他の青い草のようなものもあつたと考えられる。

また、なぜ清少納言が「菖蒲」や「蓬」のような青い草の「青ざし」を取つて皇后定子に献上するのか、その目的を考えた結果、「青ざし」は、「薬草」ではないかと考えられる。そしてこの「薬草」は、一条天皇から送られてきたものと考ええる。なぜなら、五月五日までに、天皇の身辺では薬草を採る風習があるからである。

日本における薬獵は、『日本書紀』「推古天皇十九年五月」の記事の初出例として、次のようにある。

夏五月五日、薬獵之、集<sup>二</sup>于羽田<sup>一</sup>、以相連參<sup>二</sup>趣於朝<sup>一</sup>。  
 (夏五月)の五日に、薬獵して、羽田に集ひて、相連きて朝に參趣く (15)

この風習は、古代中国の端午節の影響であつた。「夏小正、此月蓄薬、

蠲除毒氣」(『初學記』卷四、天部「五月五日」とあるように、五月は季節の変わり目で、食中毒などの病気の起りやすい不吉な月なので、薬草を置いて、邪気を払うという風習があり、それが採り入れられたものであつた。

本章段における「菖蒲」や「薬玉」も、五月五日の風物と考えられ、薬草として、邪気を祓うものと考えられるだろう。例えば、『荆楚歳時記』「菖蒲」には、「五月五日、(之を沿蘭節と謂ふ)、四民(荆楚の人)竝びに百草を踏む、又百草を闘はすの戯あり、艾を採りて以て人(形)に為り、門戸の上に懸け、以て毒気を禳ひ、(菖蒲を以て或ひは鏤め、或ひは屑とし、以て酒に泛ぶ)。(守屋美都雄『校註荆楚歳時記』帝国書院、一二三頁)とあるが、これは「シヨウブの根や葉を切つて漬けた酒。五月五日端午の節句に用いた。邪気を払い、万病を治すといわれた。しよぶざけ」(『日本国語大辞典』小学館、二五〇頁)その薬効が破邪気の風物と関連づけられたものと考えられるようになったのであろう。

また、『荆楚歳時記』によると、五月五日には、「五采の糸を以て臂に繫け(纏め)、名づけて兵(及び鬼)を辟くという、人をして瘟を病まざらしむ、」(前書同一三六頁)と記している。この「五采の糸」は、また「長命縷」、「統命縷」、「五色糸」などとも言われ、「薬玉」と呼ばれていることは、『内裏式』「五月五日観馬射式」項目には、次のように確認できる。

女藏人等執<sup>二</sup>統命縷<sup>一</sup>。薬玉。

(『神道大系 朝儀祭祀編一儀式・内裏式』精興社、三五〇頁)

さらに、『国史大辞典』(吉川弘文館)では、「薬玉」について、次のように解釈されている。

五月五日の節日に、破邪・招福・延命の瑞祥とする菖蒲・蓬などの時節の薬草を五色の霊糸で長く結び垂らして薬玉といい、臂にかけたり、御帳台の柱に吊り下げたりして安寧を祈った。大陸の端午の統命縷の影響であり、『続日本後紀』仁明天皇嘉祥二（八四九）年五月五日条には「五月五日爾薬玉乎佩天飲酒人波、命長久福在止奈毛聞食須、故是以薬玉賜比、御酒賜波久止宣」とある。『延喜式』には、統命縷の糸は中務省の蔵司、菖蒲や蓬などは左右近衛府の奉任とされ、『西宮記』三、五月には糸所の献上となつて、次第に糸花（いとばな）による造り物と化し、麝香・沈香・丁子などの香料を綿や練絹に包んで加え、花やかな燕子花（かきつばた）や橘を交えた造花に、五色の糸を垂らした匂い袋となった。内裏では、五月五日に糸所から献上された薬玉を昼の御座の御帳に九月九日の重陽の節までかけるのを例とし、重陽から菊花と茱萸（ぐみ）の袋に替えることとされた。

（七八〇頁）

このような風習と考え合わせると、本章段の五月五日に、清少納言が奉った「青ざし」は、一条天皇から用意された薬草と考えるのが自然であろう。

### 一・三 「青ざし」と「青刺」

しかし、「青ざし」も、「薬草」ならば、具体的にどのようなものであろうか。この点を、本草の面から考えてみたい。

当時の日本人が享受していた中国の本草書には、最も古い『神農本草経』（二世紀頃）に基づいて、陶弘景（四五六～五三六）が、『神農本草経集注』（五世紀末）が編纂され、唐の蘇敬（五九九～六七四）がそれを増補した勅撰の『新修本草』（六五九）があった。同書はその後、『開

宝本草』（九七三）、『嘉祐本草』（一〇六一）、『大観本草』（一一〇八）、『政和本草』（一一一六）、『紹興本草』（一一五九）などに受けつがれ、宋代以後も増補、加注が重ねられたものであった。しかし、完本で現在に伝えられるのは、『証類本草』のみで、この点を、真柳誠氏は、次のように述べている。

宋代になると印刷技術の普及もあり、政府が続々と医薬書を校訂・刊行した。その口火を切ったのは『新修本草』に増補・加注した九七三年刊の『開宝本草』で、翌年には『神農本草経』の文を白字で、その他は黒字にするなどの改訂が行われ、再度刊行されている。以来この書式が踏襲され、一〇六一年の『嘉祐本草』、一一〇八年の『大観本草』（中略）、一一一六年の『政和本草』、一一五九年の『紹興本草』のように、歴代宋政府の命で増補・加注が重ねられていった。これらのうち、完全な形で現在に伝えられているのは、『証類本草』と統称される『大観本草』『政和本草』の二系統で、各々は影印本として現在も復刻されている<sup>16)</sup>。

この『証類本草』第九卷、「大小薊根」に、「凶経」を引いて、「青刺薊」の記述が見える。

凶経…小薊根、本経不著所出州土、今处处有之、俗名青刺薊、苗高尺餘、葉多刺、心中出花、頭如紅藍花而青紫色、北人呼為千鍼草<sup>17)</sup>。  
（凶経にいう、小薊の根、『本経』（『神農本草経』）では所出の州土が記されないが、今も多くの所で見られる。俗に青刺の薊といい、苗の高さは一尺余り、葉は多くの刺（とげ）があり、真中から花を出し、頭は紅藍の花の如く、青紫色であり、北方の人は千鍼草と呼んでいる。）

「図経」は、『舊唐書』「志第二十七 経籍下」に、「本草圖経七卷蘇敬撰<sup>(18)</sup>」と『新唐書』「志第四十九 藝文三」に「本草圖経七卷（蘇敬<sup>(19)</sup>）」とあるもので、書名から推して、唐の蘇敬（五九九～六七四）が、本草に絵を加えた注釈であろう。

『新唐書』は、次のように記載している<sup>(20)</sup>。

本草二十卷

薬圖二十卷

圖経七卷

顯慶四年、英國公李勣、太尉長孫无忌、兼侍中辛茂將、太子賓客弘文館學士許敬宗、禮部郎中兼太子洗馬弘文館大學士孔志約、尚藥奉御許孝崇、胡子彖、蔣季璋、尚藥局直長蘭復珪、許弘直、侍御醫巢孝儉、太子藥藏監蔣季瑜、吳嗣宗、丞蔣義方、太醫令蔣季琬、許弘、丞蔣茂昌、太常丞呂才、賈文通、太史令李淳風、潞王府參軍吳師哲、禮部主事顏仁楚、右監門府長史蘇敬等撰<sup>(21)</sup>。

また、藤原佐世（八四七～八九七）編『日本国見在書目録』には、『新修本草廿卷』、『本草圖廿七』「卷」が見えるが<sup>(22)</sup>、後者は合計の巻数から「薬圖二十卷」と「圖経七卷」を含むものではないかと考えられる。いずれにせよ、「俗名青刺薊」との記述があることと、「図経」作者の蘇敬の『新修本草』が日本に渡来しており、蘇敬『図経』を含むと思しき「本草図廿七卷」も日本に伝わったと考えられることから、「俗名青刺薊」と伝えられた可能性は高い。（ただし、唐宋代の技術で、しかも伝写を重ねた上での図がどこまで正確な情報を伝えていたかは疑問ではある。）

また、『延喜式』卷一八式部上に、

凡医生、皆読『蘇敬新修本草』<sup>(23)</sup>

とあるように、『新修本草』は医学生の必修書でもあった。

さらに、同卷三七典薬式には、

凡読『医経』者。大素経限『四百六十日』。新修本草『三百十日』<sup>(24)</sup>。

とあり、『新修本草』を一年以内に修得することが義務付けられてもいた。「青刺薊」という表現は、今のところ、「図経」に引く俗名には見えない。しかし、鄭樵（一一〇四～一一六三）『通志』第七五卷昆虫草木記略第一にも「有一種小薊曰猫薊曰青刺薊」が見えるように、こうした本草書の伝流を考えると、「青刺薊」の説が日本に伝わっていた可能性はきわめて高い。

#### 一・四 葉草としての青刺の薊

「薊」は、『新修本草』佚文によると、「大小薊」には、

大小薊根 葉同 味甘温 主養精 保血〔中略〕安胎〔中略〕令人肥健 五月采<sup>(25)</sup>

（大小薊根は、葉も同じ、味が甘く温にして、主に精を養ひ、血を保つ〔中略〕胎を安じ〔中略〕人体を肥健ならしめる。五月に採る。）

とあり、妊婦や産後の女性の血行改善に有効な葉草だったようである。

「青刺」を「薊」とするならば、それこそが清少納言が、皇后定子に差し上げた理由であろう。

鄭樵『通志』卷七十五「草類」薊にも、



青刺薊北方曰千針草以其莖葉多刺故也<sup>(26)</sup>（青刺の薊、北の方は千針草というは、その莖と葉にとげ刺多き故を以てなり。）

とあるように、「薊」は、莖、葉に刺の多いことから「青刺」と呼ばれたるが、日本でも、食用と認識されていたことは、源順（九一一〜九八三）の『倭名類聚抄』が菜蔬部園菜に分類していることからわかる。

薊 本草云薊 阿佐美 味甘温 令人肥健 陶隱居曰 大小薊 葉並多刺<sup>(27)</sup>

とあるが、(掲出字「薊」は<sup>(28)</sup>、「薊」の俗字である<sup>(29)</sup>)。

薊が平安時代の宮廷で食用に供されたことは、例えば、『延喜式』巻三三大膳式下仁王経斎会供養料に、

薊四葉好物料<sup>(30)</sup>（巻33大膳式下仁王経斎会供養料）

あるいは、

薊六把<sup>(31)</sup>（巻39内膳式供奉雑菜）

とあり、一日六把（束）が供されたとある。

さらに、『延喜式』三九内膳式の五月五日漬年料雑菜に、

薊二石四斗。料塩七 升二合 芹十石<sup>(32)</sup>。

と五月五日に、年間の料として、二石四斗（60キロ）供された。薊を塩漬にしたらしい。

また、『倭名類聚抄』園菜で扱われたように、薊が栽培されたことは、『延喜式』巻三九内膳式にも見え、

薊一段。種子三石五斗。総单功卅四人。耕地二遍。把犁一人。馭牛一人。牛一頭。料理平和二人。糞百廿擔。运功廿人。殖功二人。芸二遍。第一遍三人。月七第二遍三人。月刈功四人。擇功八人。三年一度遷殖<sup>(33)</sup>。

と、一段の畑で栽培が営まれていた。



図 1

前掲の「図経」の引用によると、青刺の薊は、小薊であった（図1<sup>(34)</sup>）。また「本草」文にある通り、大、小薊は、いずれも婦人の胎児を安じた点から考えて、清少納言がわざわざ青刺の薊を、皇后定子に献上した理由は、五月五日当時の皇后定子は懐妊三カ月であったからだと推測できる。

しかし、中宮定子は、長保二年十二月十六日に、三番目の皇女の媛子の出産時の異常により、媛子誕生後まもなく崩御された（『権記』、『日本紀略』、『扶桑紀略』）。

平安時代の医学博士丹波康頼（九二二〜九九五）の『医心方』（九八四）には、妊娠三カ月の婦人の胎児の形成が次のように記されている。

懐身三月名曰「始胎」。当此之時「未レ有レ定義」。見レ物而化。是故  
 應レ見（中略）儂者

侏儒醜悪。（懐身三月、名ヅケテ始胎と曰フ、此時ニ当リテ、未ダ  
 定義アラズ、物ヲ見テ化ス、是ノ故ニ応ニ見ニベシ。（中略）儂者、  
 侏儒、醜悪（36）。）

懐妊三カ月日は、「胎児」を始めてなす「始胎」にあたる。くり返し  
 になるが、皇后定子の懐妊された身体の状況を、清少納言は察している  
 はずで、それ故に清少納言は、一条天皇の方面から送ってきた薬草とし  
 ての「青ざし」を取って、すなわち漢語世界で俗名「青刺」と呼ばれた「薊」  
 を、皇后定子に献上したのであろう。

## 二、「花や蝶や」について

### 二-1 問題の所在

懐妊中の定子は、清少納言の奉った「青ざし」を受けとると、次の返  
 歌で即答している。（本文は前引用文による）

みな人の花や蝶やといそぐ日もわが心（こころ）をば君ぞ知りける

下句「わが心をば君ぞ知りける」には、「君」を清少納言ととるか、  
 一条天皇ととるかににおいて、清少納言と見る説が優勢だが、前述したよ  
 うに、盤斎の校正本文には「天」とあり、「天皇」を指すと考えられ、  
 また『日本国語大辞典』解釈のように、そもそも「君」とは、「一国の  
 君主、天皇。」であり、さらに清少納言が奉った「青刺」は、一条天皇  
 から用意された薬草とみると、ここでは「君」は一条天皇として考える  
 ことが相応しいであろう。

では、上句「花や蝶や」は、従来解釈が必ずしも明らかされていない

のである。

「蝶よ花よ」という言葉は現代でも使われているが、「花や蝶や」は、  
 今では使われず、一般の辞書に立項されてもいない。『日本国語大辞典』  
 では、「蝶よ花よ」を「子をひととおりでなくいつくしみ愛するさまを  
 いう」と説明し、「蝶や花や」とも書いて、「はなやぎ栄えるさま」とい  
 う意味を表すとある。そして最も古い例として、鎌倉時代の慈光寺本『承  
 久記』で、「加程に成なんに落行たりとも、蝶や花やと栄べきか」を挙  
 げている。また延享二（一七四五）年七月初演の『浄瑠璃』夏祭浪花鑑  
 第四の「手代が恋を掘出した 浮牡丹の箱入娘」にも、次のように見ら  
 れるとある。

乳母はコレ此様に、皴も白髪もいとはず。こなたの背長（せ）の延（のび）るのを、  
 蝶（てう）よ花（はな）よと フシ（ふし）楽（たの）しみて 詞（し）おのれやがて 聳（さいご）御（ご）を取。玉の様な子  
 を産（う）んで（36）。

しかし、「蝶や花や」や「蝶よ花よ」と「花や蝶や」の表現は同じだ  
 ろうか。この点に問題をしばって考えたい。

### 二-2 「花や蝶や」の先行の解釈

まず加藤盤斎『清少納言枕双紙抄』（延宝二（一六七四）年五月）を  
 取り上げてみよう。

花やてふやとは、姫宮若宮を、花や蝶やと冊（カシツキ）祝ひ奉ると也（37）。

介添えの女房達が、端午節のため、子供達（姫宮、若宮）をちやほや大  
 切に扱い祝う様子という。

二ヶ月後に上梓された北村季吟『枕草子春曙抄』（延宝二（一六七四）

年七月)では、

みな人は薬玉をして、花蝶と色々細工を急ぐ<sup>(38)</sup>。

と「花や蝶や」を、端午節の薬玉を飾る華やかな花蝶の細工としている。いずれも解釈は、前述の「蝶や花や」、「蝶よ花よ」の説明に類似するといえよう。

次に、平成までの諸説で代表的なものを示す。

① 池田亀鑑・岸上慎二『枕草子』(岩波書店)

すべての人が権勢に赴く花やかな節日の今日、あなただけはさびしい私の心を知っているのですね<sup>(39)</sup>。

② 渡辺実『枕草子』(岩波書店)

「みな人の花や蝶やといそぐ日」は、彰子方の隆盛への思いが言わせる言葉であろう<sup>(40)</sup>。

③ 田畑千恵子『枕草子大事典』(勉誠出版)

この段の構成が、定子の歌を核とした、一種の歌語りとも言うべきものであることには異論がないだろう。だとすれば、詠歌の背景は、歌の直前までに語られているはずである。上の句の「みな人の花や蝶やといそぐ」は、若い女房たちや御匣殿(道隆四女、定子の妹)が、薬玉をもてはやし興ずる華やいだ様子に対応する。「中略」端午の節句の華やかな気分につつまれた皇后の里第、諸勢力から薬玉が献上され、周囲には大勢の若い女房たちが伺候している。この段が描くのは、今上帝の第一皇子、皇女とともにある、後の誇り高い姿そのものである。「みな人の」の歌も、そうし

た文脈の中で解釈すべきものと考ええる<sup>(41)</sup>。

右①の解釈を、権勢ある側になびく態度と見ているが、②と③では、「権勢」の対象は異なる。②は「彰子方の隆盛」と解釈され、③は「華やかな気分につつまれた皇后の里第」、つまり「皇后定子」方を指す。

このように、解釈は、まだ揺れていると見られよう。そこで、本稿では、「花や蝶や」の表現を掘り下げて、「花や蝶や」の表現には、定子の念頭に何か寓意が込められているか、などの問題を考えることにより、定子の歌の上句の意味を考えてみたい。

二.三 「花や蝶や」と和漢文学の表現

「花」は、奈良時代から平安時代までの歌に詠まれてきたが、「蝶」を詠む歌は少ない。古代日本人は「蝶」をあまり好まなかったらしい。たとえば、『古事記』や『日本書紀』には「蝶」が見えず、『万葉集』には、「蝶」が二箇所見えるが、いずれも、「序」で使われたものである。

① 『万葉集』第五卷「八一四」番

梅花歌卅二首 并序 天平二年正月十三日  
庭舞<sup>ニ</sup>新蝶<sup>一</sup> 空帰<sup>ニ</sup>故鴈<sup>一</sup> 庭に新蝶舞<sup>ひ</sup> 空に故雁帰<sup>る</sup><sup>(42)</sup>

② 『万葉集』第十七卷「三九六六」番

二月二十九日、大伴宿祢家持  
紅桃灼々 戯蝶廻<sup>レ</sup>花舞 紅桃灼々 戯蝶は花を廻りて舞<sup>ひ</sup>  
翠柳依々 嬌鶯隠<sup>レ</sup>葉歌 翠柳依々 嬌鶯は葉に隠れて歌<sup>ふ</sup><sup>(43)</sup>

①は、天平二(七三〇)年、太宰帥大伴旅人が、宴席での「梅花」歌群に、賦した序に使われたもの。庭には生れたばかりの蝶が舞い、空に

は昨年（44）の秋に来た雁が北に返って行くという初春の風景を詠む。「新蝶」、「蝶舞」、「舞蝶」等は、いずれも唐詩に頻出するもので、例えば、李賀「惱公」に「晩樹迷新蝶」があり、李商隱「即日」にも「舞蝶不空飛」が（44）、また李嶠「春日侍宴幸芙蓉園應制」に、「飛花隨蝶舞」が見られる（45）。

②「戲蝶」や「蝶戲」は、例えば、『初學記』二十八果木部「李」に唐太宗皇帝の詩、「蝶戲脆花心」があり、『芸文類聚』五十職官部「刺史」に、梁元帝「戲蝶時飄粉」があるなど唐代類書に引かれる語句である（46）。「万葉集」の用例は、いずれも「序文」に現れるもので、歌語ではない。その意味で、歌語としての「蝶」は詠まれていないといえる。

『万葉集』以降も、『枕草子』以前の勅撰集、私撰集、私家集で、「蝶」を詠まれた歌は少ないが、『古今和歌集』と『拾遺和歌集』に各一首、『古今和歌六帖』には二首ほど、「蝶」を物名題として詠んだものがある。

(1) 『古今和歌集』「卷第十」「物名」「くたに」「四三五」番

(僧正遍昭)

散ぬれば（47）後は芥（47）になる花を思（47）しらず（47）もまどふて（47）ふ哉（47）

(2) 『拾遺和歌集』「卷第七」「物名」「あさがほ」「二六四」番

(作者不明)

我が宿（48）の花の葉にのみ寝る蝶（48）のいかなるあさがほかよりは来る（48）

(3) 『古今和歌六帖』「第六」「てふ」「四〇二二」番 (作者不明)

おほえてらこれはたれぞも世の中にあだなるてふにみゆる花（49）かは（49）

(4) 『古今和歌六帖』「第六」「てふ」「四〇二三」番 (作者不明)

いへばえにい（50）はねばさらにあやしくもかげなるいろのてふにも有るかな（50）

右(1)の「てふ」は、異本に「といふ」とも示され、「夢中になる」ということだの説もある（51）が、「てふ」は、「蝶」とすると、美しい花が散りしおれてゴミとなっていくことに心を乱すと言う。(2)の「てふ」は、いつもは我が家の花の葉にばかり寝るが、今朝はいつたいてうしてほかのところからやってきた。(3)と(4)は、『古今和歌六帖』第六帖「虫」の「むし、せみ、夏むし、きりぎりす、まつむし、すずむし、ひぐらし、ほたる、はたをりめ、くも、てふ」の「てふ」の二首であるが、いずれも作者が分からず、不明な点多い。いずれにせよ、(3)と(4)及び(1)と(2)の四首における「蝶」の詠み込まれ方は、本章段における定子が詠まれた「花や蝶や」と異なる使われ方であることは言うるであろう。

では、漢語としての「花蝶」は、奈良から平安までの漢詩文では、どのように使われているのだろうか。そこで、前に述べた作品以後の表現を、代表的な漢詩文集から追ってみよう。

#### A 『懷風藻』

1 紀朝臣麻呂(七〇五没)「春日」

階梅鬪素蝶 塘柳掃芳塵（52）

2 犬上王(七〇九没)「遊覽山水」

吹台嘒鶯始 桂庭舞蝶新（53）

3 紀朝臣古麻呂(生没年未詳)「望雪」

柳絮未飛蝶先舞 梅芳猶遲花早臨（54）

B 『凌雲集』

- 4 嵯峨天皇（七八六～八四二）「神泉苑花宴賦 落花篇」  
紅英落処鶯亂鳴 紫萼散時蝶群驚<sup>(55)</sup>

- 5 小野岑守（七七八～八三〇）「雜言於神泉苑待讎賦落花篇心製」  
遊蝶息尋葉初見 群蜂罷釀草纒生<sup>(56)</sup>

- 6 小野岑守（七七八～八三〇）「雜言奉和聖製春女怨」  
林暮婦禽簷□□ 園曛遊蝶抱花眠<sup>(57)</sup>

C 『文華秀麗集』

- 7 嵯峨天皇（七八六～八四二）「舞蝶」  
數群胡蝶飛亂空 雜色紛紛花樹中<sup>(58)</sup>

- 8 桑原腹赤（七八九～八二五）「和野內史留後看殿前梅之作」  
待蝶香猶富 藏鶯影未寬<sup>(59)</sup>

- 9 巨勢識人（生没年未詳）「神泉苑九日落葉篇心製」  
繞叢宛似莊周蝶 度浦遙疑郭泰舟<sup>(60)</sup>

D 『經国集』

- 10 嵯峨天皇（七八六～八四二）「春江賦」  
花飛江岸 草長河畔 蝶態紛紜 鶯声撩亂<sup>(61)</sup>

- 11 石上宅嗣（七二九～七八一）「七言三月三日於西大寺侍宴心詔一首」  
青糸柳陌鶯歌足 紅藥桃溪蝶舞新<sup>(62)</sup>

- 12 菅原清公（七七〇～八四二）「五言奉和春日作一首」  
樹暖鶯能語 藜芳蝶自奢<sup>(63)</sup>

- 13 滋野貞主（七八五～八五二）「雜言臨春風効沈約体心製」  
黃鶯雜沓誰求媒 素蝶翩翻不倦廻<sup>(64)</sup>

- 14 桑原腹赤（七八九～八二五）「雜言奉和清涼殿画壁山水歌一首」  
蜂蝶紛飛寧換藜 煙霞澹蕩不復空<sup>(65)</sup>

E 『性靈集』

- 15 空海（七七四～八三五）「為酒人內公主遺言」  
既知夢蝶之非我 還驚谷神之忽休<sup>(66)</sup>

- 16 空海（七七四～八三五）「九想詩十首」「瓊骨猶連相第六」  
畏影不知陰 如蝶居世雲<sup>(67)</sup>

F 『本朝麗藻』

- 17 藤原公任（九六六～一〇四一）「暮春〔中略〕賦度水落花舞心製」  
双行蝶導流心動 送曲風來浮艷輕<sup>(68)</sup>

- 18 藤原齊信（九六七～一〇三五）「暮春〔中略〕賦度水落花舞心製」  
鶴遊蝶戲心同意 率舞皆知治世声<sup>(69)</sup>

G 『本朝無題詩』

- 19 藤原敦基（一〇四六～一一〇六）「賦瞿麥」  
褰簾倩見遊蜂戲 移榻豈饒舞蝶忙<sup>(70)</sup>

- 20 惟宗孝言（生没年未詳）「春夜述懷」  
偏感莊周夢作蝶 暫交翹楚曉聞鷄<sup>(71)</sup>
- 21 藤原忠通（一〇九七～一一六四）「秋三首」  
日高蝶臥老甚哉 紙隔松門牖未開<sup>(72)</sup>
- 22 藤原通憲（一一五九没）「秋日即事」  
空疲鑽仰聚畿業 未識是非夢蝶心<sup>(73)</sup>
- H 『菅家文章』  
23 菅原道真（八四五～九〇三）「殘菊詩」  
蝶栖猶得夜 蜂採不知秋<sup>(74)</sup>
- I 『菅家後集』  
24 菅原道真（八四五～九〇三）「辨地震」  
至若栩栩蝶飛說 閑素道之玄宗<sup>(75)</sup>
- J 『都氏文集』  
25 都良香（八三四～八七九）「決群忌」  
蝶迎軍騎 定為何徵<sup>(76)</sup>
- K 『田氏家集』  
26 島田忠臣（八二八～八九二）「五言禁中瞿麥花詩三十韻」  
當時駢蝶子 毎日引蜂玉<sup>(77)</sup>
- 27 島田忠臣（八二八～八九二）「七言就花枝応製一首」  
非暖非寒陪月砌 如蜂如蝶就花枝<sup>(78)</sup>

- 28 島田忠臣（八二八～八九二）「菊花」  
釀蜜蜂休投葉底 尋香蝶斷上花脣<sup>(79)</sup>
- L 『本朝文粹』  
29 兼明親王（九一四～九八七）「兎裘賦」  
夢蝶之翁 任是非於春叢 冥冥之理 無適無莫<sup>(80)</sup>
- 30 源順（九一一～九八三）「後三月〔中略〕賦今年又有春各分一字心教」  
婦谿歌鶯 更逗留於孤雲之路 辭林舞蝶 還翩翩於一月之花<sup>(81)</sup>
- 31 大江朝綱（八八六～九五八）「暮春同賦落花乱舞衣各分一字心太上皇製」  
於是遠尋姑射之岫 誰伝鶯歌 亦問無何之鄉 不奏蝶舞<sup>(82)</sup>
- M 『和漢朗詠集』卷上「閏三月」  
32 婦谿歌鶯 更逗留於孤雲之路 辭林舞蝶 還翩翩於一月之花<sup>(83)</sup>
- 右A～Mまでの1～32箇所にわたる「蝶」に関する表現の、G 19～22までの作者の時代は『枕草子』成立の以後であり、参考のために掲げた。またF 17と18の藤原公任と藤原斎信の詩句は、清少納言と同時代人の作であるが、寛弘三（一〇〇六）年三月四日に藤原道長より宮廷で行った詩会<sup>(84)</sup>で書かれた作品である。つまり、これも『枕草子』の後の詩作である。
- 右のゴシック字を付けたように、漢詩賦における「花」と「蝶」に関する描写は少なくない。例えば、Aの3、Bの6、Cの7、Dの11、Kの27、28、Lの30、Mの32などがある。しかし、詩語としての「花蝶」

は見当たらない。また、前述したように、『万葉集』序文に表した「舞蝶」、「飛蝶」、「戯蝶」等の表現も見えるように、これらの蝶に関する表現にも、中国の漢詩文の影響が見られる。例えば、Cの9などの夢に関する蝶は、『莊子』内篇「齋物論」による夢の蝶<sup>(85)</sup>と関係があるが、詩語として使われる方法は、白楽天の詩作に、幾つかの場面で援用されている。一例を示してみると、『白氏文集』巻二八「疑夢二首」のうち、「蝶花莊生詎可知」(『白居易集箋校』上海古籍出版社・一九六六頁)があるだろう。このように、詩語としての「花蝶」は、現存の日本漢詩文の中には見えない。では、中国の詩集における「花蝶」はどうであろうか。たとえば、全唐詩における「花蝶」の用例は、次の通りである。

(ア)〔唐〕楊 續「安德山池宴集」

花蝶辭風影 蘋藻含春流<sup>(86)</sup>

(イ)〔唐〕上官儀「早春桂林殿應詔」

花蝶來未已 山光暖將夕<sup>(87)</sup>

(ウ)〔唐〕董思恭「詠風」

花蝶自飄舞 蘭蕙生光輝<sup>(88)</sup>

(エ)〔唐〕白居易「步東坡」

新葉鳥下來 菱花蝶飛去<sup>(89)</sup>

(オ)〔唐〕万俟造「龍池春草」

遲引縈花蝶 偏宜拾翠人<sup>(90)</sup>

(カ)〔唐〕李弘茂「詠雪」

甜於泉水茶須信 狂似楊花蝶未知<sup>(91)</sup>

(キ)〔唐〕清 江「春遊司直城西鷗」

春深花蝶夢 曉隔柳煙鞞<sup>(92)</sup>

右のように、(ア)～(キ)まで七箇所「花蝶」が見える。それらの内、(エ)白居易(白楽天)の作品は『枕草子』の本章节における「花や蝶や」の典拠として、最も相応しいと考えられる。

一方、詩作以外に目を向けると、日本でも、永観二(九八四)年成立の源為憲『三宝絵』の序文の中に、漢字と片仮名交じりの「花や蝶や」がある<sup>(93)</sup>ことが注目される。しかも、これは『枕草子』に先行する唯一<sup>(94)</sup>の例である、これも併せて、検討されるべきものだろう。まず、現存三種の伝本の該当する箇所を示してみよう。

I 東寺観智院旧蔵本

男女奈と仁寄ツ、花や蝶ヤトイヘレハ罪ノ根ノこ葉ノ林ニ露ノ御

心モト、マラシナニヲ<sup>(95)</sup>

II 前田育徳会尊経閣蔵本

寄男女云花蝶罪根辞林露心不留<sup>(96)</sup>

III 東大寺切 関戸家蔵本

(該当する本文なし)<sup>(97)</sup>

右のように、IIIは該当する本文は残されず、IIの表記は漢文で、Iには漢字の間に片仮名混じりの表現。どの系統が為憲の原文に近いかについては、定説を見ていない<sup>(98)</sup>。

作者の源為憲は、かつて元録元(九七〇)年藤原為光の子のために、漢文で『口遊』を編纂し、また寛弘四(一〇〇七)年、藤原道長の子の

ために、漢文で『世俗諺文』を作った。右『三宝絵』は、『口遊』と『世俗諺文』の間の、永観二(九八四)年、女性である尊子内親王のために作った書物である。

しかも、『三宝絵』には、『枕草子』より先に唯一「花や蝶や」の表現がある。ここで注意したい点は、『枕草子』における「花や蝶や」は、『三宝絵』の受容であろうか、それとも『三宝絵』も『枕草子』も、前掲した漢語としての詩語「花蝶」から受容された表現であろうか。この点に關しては、相田満氏が、

先蹤となる中国作品の存在は考えられないか、あるいは詩文秀句・漢故事・格言の引用典拠は何か等の問題である<sup>(99)</sup>。

と指摘されたように、やはり『三宝絵』と『枕草子』における「花や蝶や」、「花や蝶や」の表現は、漢語としての詩語「花蝶」からの影響と考え、特に『白氏文集』感傷詩句「菱花蝶飛去」を受け取った表現と考えてみたい<sup>(100)</sup>。

ただ、紙幅に限りがあるため、『三宝絵』は展開しないが、『枕草子』の「花や蝶や」と白詩を中心に論じる。

では、この秀句を含む『白氏文集』第一巻感傷詩「歩東坡」を取り上げておこう。

歩<sup>二</sup>東坡<sup>一</sup> 東坡を歩く  
朝上<sup>二</sup>東坡<sup>一</sup> 朝<sup>あした</sup>に東坡<sup>とうば</sup>に上<sup>のぼ</sup>りて歩<sup>ほ</sup>し  
夕上<sup>二</sup>東坡<sup>一</sup> 夕<sup>ゆふ</sup>べに東坡<sup>とうば</sup>に上<sup>のぼ</sup>りて歩<sup>ほ</sup>す。  
東坡何所<sup>レ</sup>愛 東坡<sup>とうば</sup> 何<sup>なん</sup>の愛<sup>あい</sup>する所<sup>ところ</sup>ぞ、  
愛<sup>二</sup>此新成樹<sup>一</sup> 此<sup>こ</sup>の新成<sup>しんせい</sup>の樹<sup>き</sup>を愛<sup>あい</sup>す。

種<sup>二</sup>植當<sup>一</sup> 歲初<sup>一</sup>

滋<sup>二</sup>榮及<sup>一</sup> 春暮<sup>一</sup>

信<sup>レ</sup>意取次<sup>裁</sup>

無<sup>レ</sup>行亦無<sup>數</sup>

綠陰斜景<sup>轉</sup>

芳氣微風<sup>度</sup>

新葉鳥<sup>下</sup>來

菱花蝶飛<sup>去</sup>

閑携<sup>二</sup>斑竹杖<sup>一</sup>

徐<sup>曳</sup> 黃麻履<sup>一</sup>

欲<sup>レ</sup>識<sup>二</sup>往來類<sup>一</sup>

青苔成<sup>二</sup>白路<sup>一</sup>

種<sup>しゆ</sup>植<sup>しよく</sup> 歲<sup>さい</sup>初<sup>しよ</sup>に當<sup>あ</sup>たり、

滋<sup>じ</sup>榮<sup>えい</sup> 春<sup>しゆん</sup>暮<sup>ぼ</sup>に及<sup>およ</sup>ぶ。

意<sup>い</sup>に信<sup>まか</sup>せて取<sup>しゆじ</sup>次に裁<sup>う</sup>え、

行<sup>かう</sup>無<sup>な</sup>く亦<sup>また</sup>數<sup>すう</sup>無<sup>な</sup>し。

綠<sup>りよく</sup>陰<sup>いん</sup> 斜<sup>しや</sup>景<sup>けい</sup>轉<sup>てん</sup>じ、

芳<sup>ほう</sup>氣<sup>き</sup> 微<sup>び</sup>風<sup>ふう</sup>度<sup>わた</sup>る。

新<sup>しん</sup>葉<sup>えふ</sup> 鳥<sup>とり</sup> 下<sup>くだ</sup>來<sup>きた</sup>り、

菱<sup>あひ</sup>花<sup>わ</sup> 蝶<sup>てつ</sup> 飛<sup>と</sup>び去<sup>さ</sup>る

閑<sup>かん</sup>か<sup>か</sup>に斑<sup>はん</sup>竹<sup>ちく</sup>の杖<sup>づゑ</sup>を携<sup>たづ</sup>へ、

徐<sup>じゆ</sup>ろ<sup>ろ</sup>に黃<sup>わう</sup>麻<sup>ま</sup>の履<sup>りふ</sup>を曳<sup>ひ</sup>く

往<sup>わう</sup>來<sup>らい</sup>の類<sup>るい</sup>なるを識<sup>し</sup>らんと欲<sup>ほつ</sup>せば、

青<sup>せい</sup>苔<sup>たい</sup> 成<sup>せい</sup>る 白<sup>はく</sup>路<sup>ろ</sup>と成<sup>せい</sup>る<sup>(101)</sup>。

元和十三(八一八)年、詩人が「江州司馬」から「忠州」に移転され、「忠州刺史」を勤めた二年目、元和十五(八二〇)年、四九歳の白楽天が、右の感傷詩「歩東坡」を書いたのである。感傷詩とは、「事物の外に牽き、情理の内に動き、感遇に随いて嘆詠に形わる者」百首あり、之れを感傷詩と謂う<sup>(102)</sup>である。

忠州の城の東に大きな山坡地があつて、そこで詩人が多種の花が咲く木を植えていた。朝も夕も、花の木の様子を見に散歩していた白楽天が、ある日感興を覚えて、右の詩を詠んだ。注意したいのは、ゴシック部「新葉鳥下來 菱花蝶飛去」である。「鳥」と「蝶」で擬人法を用い、新しい葉が出る際には、鳥が飛んでくる。萎れる花に對して、蝶が飛び去るという人間において新しいものを好み、古いものを厭う人情を表す。これは詩人が左遷された生活経験によって、深く内心に響く、嘆詠した人間関係の弱点を表したといえよう。

ただし、詩人の泰然自若とした態度は、まさしく下定雅弘氏が指摘し



たように、「白居易は、感傷詩においては、煩惱を滅却しようとして仏教を希求している<sup>(103)</sup>。」といえよう。

前掲した源為憲『三宝絵』序文による「男女奈と仁寄ツ、花や蝶やトイヘレハ罪ノ根ノ」(東寺観智院旧蔵本)、あるいは「寄男女云花蝶罪根」(前田育徳会尊経閣蔵本)において「花や蝶や」、「花蝶」の典拠もまた、同じ白楽天の感傷の詩句「菱花蝶飛去」の「花蝶」と考えられよう。「菱花蝶飛去」という新しいものを好み、古いものを厭う男女関係の場合の移り気は、罪の根になるということであろう。

皇后定子は、『三宝絵』序文によるか、『白氏文集』第一巻感傷詩によるか、それとも両方を踏まえたのか、いずれにせよ、「花や蝶や」の典拠として、『白氏文集』の「菱花蝶飛去」を考えることは無理ではないであろう。

皇后定子が、「菱花蝶飛去」を取り込んだ手法について、次の節に述べたい。

## 二四 「菱花蝶飛去」の寓意

定子が白詩に習熟しており、それを取り込んだことは、例えば、『枕草子』第二八〇段「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて」で、定子が次のように、『白氏文集』の詩句を引用したことで著名である。

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などしてあつまりさぶらふに、「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ<sup>(104)</sup>。

定子が「少納言よ、香炉峰の雪はどんなであろう」と清少納言に尋ねるやいなや、清少納言が、すばやく御簾を高く巻きあげたやりとりは、『白

氏文集』卷十六「香炉峰下 新ト山居草堂初成 偶題東壁 重題」のうち、対句の下句の「香炉峰」をふまえた応報である。

遺愛寺泉欹枕聴 香炉峰雪撥簾看<sup>(105)</sup>

同様に、本章段では、定子が『白氏文集』卷十一「歩東坡」のち、「菱花蝶飛去」の「花蝶」を援用したと考える。

新葉鳥下来 菱花蝶飛去(本文は前掲同)

いずれも対句の下句の詩句を部分的に引用したことも、手法的に一致している。

平安時代では、詩語、詩句を部分的に撰取する手法について、金子彦二郎氏が指摘されたように、「黄泉」を「きなるいづみ」、「風流」を「かぜのながれ」と言った類の一種の訓読的用例も多く見える。例えば、貫之の歌に白詩「都無秋雪詩」の詩語「秋雪」を撰取した「衣手は寒からねども月かげをたまらぬ秋の雪かとぞ見る」などとあるのがそれである<sup>(106)</sup>。

この方法で、白楽天の詩句を翻案して和歌に読む場面も、『枕草子』にも見られる。例えば、「第一〇二段」「二月つごもりごろに、風いたう吹きて」の中で、藤原公任から来た手紙の中には、『白氏文集』卷十四「南秦雪」の対句の下句を翻案した和歌に対して、清少納言は、対句の上句を撰取して返事をしたという場面である。対句と翻案の和歌は次のようになる。

白氏文集…二月山寒少春

藤原公任…すこし春ある心地こそすれ

白氏文集…三時雲冷多飛雪

清少納言…空寒み花にまがへて散る雪に<sup>(107)</sup>

公任は漢詩句「少春有春」を「すこし春ある」と詠み、清少納言は、「多飛雪」を「散る雪に」と詠んだ。清少納言の返答について、藤原公任の評判が見えないが、前掲した定子との『白氏文集』の詩句を応答する場面とを合わせてみると、清少納言が深く『白氏文集』の詩句を知っていることは十分推察できるであろう。

本章段において定子の歌の「花や蝶や」が、『白氏文集』の詩句「萎花蝶飛去」を踏まえものであったことは、当然、清少納言が知っているはずと理解され、それに対して清少納言は「いとめでたし」との賛美で段を結んでいると考えられる。皇后定子の「花や蝶や」において「萎花蝶飛去」の寓意を知った上でのこととすると、段落の余韻は俄然深いものになってくる。すなわち定子は自らの状況を萎れる花に例え、周りの若い女房達が蝶のように急ぎ飛び去ってゆく比喻を定子が詠んだことからは、悲劇的な現実に対する無力感の心情を表す慨嘆さえも伝わるのである。

定子の不幸な境遇は、否定できない事実として、古記録に残されている。例えば、本章段の長保二(一〇〇〇)年五月五日に関わる前後を一覧してみよう。

長保二(一〇〇〇)年

二月十日 女御彰子蒙下可立后之宣旨上。仍出御内裏。<sup>(『日本紀略』)</sup>

本紀略<sup>(1)</sup>

二月二十五日 以女御從三位藤原朝臣彰子為皇后。<sup>(『日本紀略』)</sup>

本紀略<sup>(1)</sup>

三月二十七日

以三元中宮職(定子)為皇后宮職。<sup>(『日本紀略』)</sup>  
皇后宮出御散位平生昌朝臣宅。<sup>(『日本紀略』)</sup>

五月四日

八月八日

八月二十七日

十月十一日

十二月十五日

十二月十六日

<sup>(1) 條天皇</sup>  
主上渡御中宮御方、(『權記』)

皇后宮自生昌朝臣宅入御内裏。<sup>(『日本紀略』)</sup>

皇后宮還御本宮。<sup>(『日本紀略』)</sup>

天皇自一条院還御新造内裏。<sup>(『日本紀略』)</sup>

皇后定子於<sup>(中略)</sup>平生昌宅。有御産事。<sup>(『日本紀略』)</sup>

本紀略<sup>(1)</sup>

皇后崩給。年廿五。在位十一年。<sup>(『日本紀略』)</sup>

右に示したように、二月二十五日から藤原彰子が新たな中宮となり、元の中宮定子は皇后に変わった。そして翌月二十七日に定子が宮を出て、本章段の三條の宮の平昌宅に遷御する。五月五日の前夜、一条天皇は新たな中宮のところに outward ことは分かる。翌日の端午節のお祝いの状況は、中宮彰子と皇后定子とで対照的であったと『栄花物語』に記される。

〔中宮彰子〕はかなく五月五日になりぬれば、人々菖蒲、棟などの唐衣、表着なども、をかしう折知りたるやうに見ゆるに、菖蒲の三重の御几帳ども薄物にて立てわたされたるに、上を見れば御簾の縁もいと青やかなるに、軒のあやめも隙なく葺かれて、心ことにめでたうをかしきに、御薬玉、菖蒲の御輿など持てまゐりたるもめづらしうて、若き人々見興ず<sup>(108)</sup>。(『かぐやく藤壺』)

右の中宮彰子の方面では、傍線を付いたように、若き人々の興奮している場面が見える。一方、皇后定子の方面では、「涙」をこぼすばかりの状況である。

〔皇后定子〕皇后宮には、あさましきまでものみおぼえたまひければ、御おととの四の御方をぞ、今宮の御後見よく仕まつらせたまふ

べきやうに、うち泣きてぞのたまはせける。御匣殿も、「ゆゆしきことを」と聞えて、うち泣きつつぞ過ぐさせたまひける。月日もはかなく過ぎもていきて、内にはいとど皇后宮の御有様をゆかしく思ひきこえさせたまひつつ、おほつかながらぬ御消息つねにあり。宮たちのおうつくしうおはしますさまかぎりなし<sup>(10)</sup>。「かゞやく藤壺」

右に述べた「御匣殿」という人は、まさしく清少納言が本章段で、(御匣殿など薬玉して、姫宮、若宮につけ)として書かれた人物であろう。これは定子の妹、藤原道隆の四女であり、第一皇子敦康親王(二歳)、脩子内親王(五歳)に薬玉を付けた人である。また、清少納言は応答の中で、定子の涙にはまったく触れていなかった。しかし定子は白楽天の「葵花蝶飛去」の寓意を込めて、自らの愁思を歌に託して吐露する。それに対し、清少納言は感心して無言で「いとめでたし」と記したのである。皇后定子の悲劇的な状況について、坏美奈子氏は次のように述べている。

定子の短い生涯のその晩年は実に過酷なものであった。それまでも、后として受けたさまざまな試練から、一条がその定子を守る術はなかったのである<sup>(11)</sup>。

まさしく坏氏が指摘されたように、前に掲げた古記録の如く、懐妊中の皇后定子は八月八日、平生昌の宅から内裏に遷御し、しかも月末にまた平生昌の宅に戻る。この時期、定子は妊娠六ヶ月に相当するであろう。このような不安定な生活もあり、三番目皇女を出産し、まもなく崩御されることとなった。わずか二十五歳(『日本紀略』)、あるいは二十四歳(『権記』)であった。

こうした背景を踏まえるにつけ本章段において定子の歌は、絶唱とも言えるのではないであろうか。

## おわりに

以上、『枕草子』「三条の宮におはしますころ」章段における漢語の表現について考察してきた。特に「青ざし」と「花や蝶や」に注目して検証してきた。その結果をまとめて言うと、次のようになる。

まず、「青ざし」については、従来の研究の「青麦」で作られた「菓子」という解釈は、必ずしも本章段の五月の季節に合うものとは言えず、また青麦という材料から作られた菓子という説は近世頃からにすぎないことから、それを再検証した結果、五月五日端午節の風物としての菖蒲や薬玉のような薬草の漢語である「青刺」の「薊」と考証した。

次に、「花や蝶や」を改めて白楽天の詩句を受容したと解説した。「花や蝶や」という表現は、「花や蝶や」、「花蝶」として『三宝絵』『序文』にも見え、これらの「花や蝶や」の典拠は、『白氏文集』卷十一「歩東坡」の詩句「葵花蝶飛去」からの「花蝶」であると考察した。

こうしたことを踏まえ本章段を考えると、『枕草子』の新たな読みが可能になってくる。特に本章段によって、長保二(一〇〇〇)年五月五日、懐妊されている皇后定子は、白楽天の感傷詩の「葵花蝶飛去」<sup>(12)</sup>を踏まえた歌を読まれ、清少納言は当時の定子の心情を把握して「いとめでたし」と述べている。この点にも、また『枕草子』の一面を見ることができらるだろう。

## 注

- (1) 本稿『枕草子』の引用文は、三巻本『枕草子』、松尾聰・永井和子校注『新編日本古典文学全集』(小学館)により、能因本『枕草子』『日本古典文学全集』(小学館)により、前田家本『枕草子』田中重太郎校注(古典文庫)により、堺本『堺本枕草子評釈』速水博司校注(有朋社)による。また渡辺実校注『枕草子』『新日本古典文学大系』(岩波書店)、田中重太郎『校本枕草子』(古典文庫)及び津島知明・中島和歌子『新編枕草子』(おうふう)を参照した。

- (2) 田中重太郎解説「枕・ほそとのにひんなき人なん 三條の宮に(三ウ) 勸物「長保元年八月九日自式御曹司移生昌三条宅、二年五月」枕草子 徒然草』『陽明叢書 国書篇 第十輯』思文閣、一九七五年、二四八頁。
- (3) ①「年廿五」『日本紀略』『国史大系 第十一卷日本紀略・百鍊抄』一九六頁。②「年廿四」『権記』『史料編纂集 権記第二』六八頁。
- (4) 本章段に関する考察は、昭和から平成まで、主な論は発表年次によって、次のように示す。①下玉利百合子「青ざしの歌 至高なる人間芸術——定子皇后と清少納言——」『枕草子幻想 定子皇后』思文閣、一九七七年。②藤本宗利「籬越しの歌語り——三条の宮におはしますころの段をめぐって——」『常葉国文』一九九五年。③田畑千恵子「三条の宮におはしますころ(第二五段)」『枕草子大事典』勉誠社、二〇〇一年。④坪美奈子「五月五日の定子後宮——まだ見ぬ御子への予祝——」『物語研究』二〇〇三年。⑤山田利博「『枕草子』「三条の宮におはしますころ」段についての一私解」『宮崎大学教育文化学部紀要(人文科学)』二〇〇三年。⑥井上新子「『枕草子』「三条の宮におはしますころ」の段考——定子後宮における文学的機知という視点からの試解——」『枕草子の新研究』新典社、二〇〇六年。⑦中島和歌子「『枕草子』の五月五日——「三条の宮におはしますころ」の段が語る本書の到達点——」『枕草子 創造と新生』翰林書房、二〇一一年。
- (5) 山田利博「『枕草子』「三条の宮におはしますころ」段についての一私解」『宮崎大学教育文化学部紀要』二〇〇三年、第九号、三二頁。
- (6) 加藤盤斎「清少納言枕草紙抄」『日本文学古注釈大成』日本図書センター、一九七八年、六四一頁。
- (7) 北村季吟「枕草子春曙抄扛園抄」『日本文学古注釈大成』日本図書センター、一九七八年、五八九頁。
- (8) 近年、本章段に関する論考では、「青ざし」という物については、基本的に「青麦で作った菓子」と理解されている。例えば、①井上新子「そうした営みのかたわらで、清少納言が持つて来てあった「青ざし」といふ物」(青麦で作った菓子)を「これ、籬越しにさぶらふ」という発言とともに皇后定子へ献上し、これに定子は「皆人の」歌をもって応えた。『枕草子』「三条の宮におはしますころ」の段考
- 定子後宮における文学的機知という視点からの試解』『枕草子の新研究』新典社、二〇〇六年、三三五頁。②赤間恵都子「清少納言の趣向は、「青ざし」(麦で作った菓子)」に『古今六帖』の歌「ませ越しに麦はむ駒のはつはつに及ばぬ恋も我はするかな」をかけたものである。『長保二年の章段について』『枕草子日記的章段の研究』三省堂、二〇〇九年、二〇二頁。
- (9) 田畑千恵子「三条の宮におはしますころ」『主要章段解説』『枕草子大事典』勉誠出版、二〇〇一年、四七〇頁。
- (10) 藤本宗利「三条の宮におはしますころ」の歌語り』『枕草子研究』風間書房、二〇〇二年、二六三頁。
- (11) 山田利博「『枕草子』「三条の宮におはしますころ」段について」『源氏物語解析』明治書院、二〇一〇年、四〇六頁。
- (12) 例えば、①『新潮日本古典集成』(新潮社)「五日の節供に消費する菖蒲草の量は莫大である」一二二頁。②『新日本古典文学大系』(岩波書店)「節句直前だから、当然「菖蒲」である。「おほく」とあったのと照応する」二五五頁。③『新編日本古典文学全集』(小学館)「節句に用いる菖蒲」三四八頁。④『新編枕草子』(おうふう)「端午の菖蒲」二二九頁。
- (13) 『本朝月令』清水潔編『新校本朝月令』皇学館大学神道研究所、二〇〇二年、三三三頁。
- (14) 『小右記』『増補 史料大成 別巻二』臨川書店、一九九七年、三四三頁。
- (15) 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋『日本書紀』(下) 岩波書店、二〇〇三年、一九九頁。
- (16) 真柳誠「中国本草と日本の受容」『日本版 中国本草図録』巻九、中央公論社、一九九三年、二一八～二一九頁。
- (17) 唐慎微撰・艾晟校定『経史証類大観本草』三一巻、広川書店、一九七〇年、二四六頁。
- (18) 『舊唐書』中華書局版「卷四十七 志第二十七」『経籍下』二〇四八頁。
- (19) 『新唐書』(中華書局版)「卷五十九 志第四十九」藝文三「醫術類」一五七〇頁。
- (20) 前掲(19)同。
- (21) 前掲(19)同。

- (22) 矢島玄亮『日本国見在書目録——集証と研究——』汲古書院、一九八四年、一九四頁。
- (23) 皇典講究所全国神職会『延喜式』大岡山書店、一九三二年、六六四頁。
- (24) 皇典講究所全国神職会『延喜式』大岡山書店、一九三一年、一四四頁。
- (25) 尚志鈞輯校『唐・新修本草』中国安徽科学技术出版社、一九八一年、二二七頁。
- (26) 「宋」鄭樵『通志』（中華書局、一九八七年）に拠る。
- (27) 正宗敦夫校訂『倭名類聚抄』（風間書房、一九七七年）巻十七・二十二（裏）に拠る。
- (28) 陳彭年等撰『廣韻』（一〇〇八）下「國學基本叢書簡編」（商務印書館）に参照。
- (29) 正宗敦夫校訂『類聚名義抄』風間書房、二〇〇四年、九五二頁。
- 薊 草名（中略） 俗作薊
- 薊 五各
- 薊 心
- 薊 今大薊 ヤチヤチ
- 薊 計子
- (30) 皇典講究所全国神職会『延喜式』大岡山書店、一九三一年、一〇六二頁。
- (31) 皇典講究所全国神職会『延喜式』大岡山書店、一九三一年、二一六〜二一七頁。
- (32) 皇典講究所全国神職会『延喜式』大岡山書店、一九三一年、二一八頁。
- (33) 皇典講究所全国神職会『延喜式』大岡山書店、一九三一年、二二八頁。
- (34) 参考図絵は『本草綱目』鼎文書局、一九七三年による。
- (35) 原文は、『医心方』『卷第廿一札記』（オリエント出版社、一九九一年）より、書き下し文は、富士川游『日本医学史（全）』（真理社、一九五二年）による。七二頁。
- (36) 乙葉弘『浄瑠璃集』上、岩波書店、一九六五年、二四二頁。
- (37) 加藤盤斎『清少納言枕草紙抄』誠進社、一九七八年、六四〇頁。

- (38) 北村季吟『枕草子春曙抄』誠進社、一九七八年、五九〇頁。
- (39) 池田龜鑑・岸上慎二『枕草子』岩波書店、二六三頁。
- (40) 渡辺実『枕草子』新日本古典文学大系、岩波書店、二六三頁。
- (41) 田畑千恵子「三条の宮におはしますころ（第二二五段）」主要章段解説『枕草子大事典』勉誠出版、四七一〜四七二頁。
- (42) 山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注『万葉集』岩波書店、一九九九年、四六五〜四六六頁。
- (43) 前掲(42)同。一二四〜一二五頁。
- (44) 引用文は、李賀「惱公」本文は、『全唐詩』（中華書局、二〇〇八年）第十二冊、卷三百九十一、四四一〇頁により、李商隱「即日」本文は、『全唐詩』（上同）第十六冊、卷六一九〇頁に拠る。
- (45) 『李嶠雜詠百二十首』には、この詩が見えず、『全唐詩』（前掲44同）第三冊、卷五八に、題「春日侍宴幸芙蓉園応制」には見られる。六九二頁。
- (46) 類書の引用文は、『唐代四大類書』（清華大学出版社）『初学記』影印本による。一八七八頁。『芸文類聚』影印本による。一〇九九頁。
- (47) 小島憲之・新井栄蔵校注『古今和歌集』岩波書店、一九八九年、一四三頁。
- (48) 小町岩照彦校注『拾遺和歌集』岩波書店、一九九〇年、一〇五頁。
- (49) 『新編国歌大観』角川書店、二〇〇三年、二四八頁。
- (50) 右(49)同。
- (51) 引用文は、小沢正夫『古今和歌集』（小学館、一九七九年）に拠り、また片桐洋一『古今和歌集』（笠間書院、二〇〇五年）を参考にした。「といふ」考証について、次の竹岡正夫『古今和歌集全評釈』上（右文書院、一九八一年）に拠る。
- 「といふ」のつづまったと解するもの
- 花ハチツテシマヘバ後ニハ芥ニナツテシマウテ ナンデモナイ物チヤニソレヲエガテンセズシテアハウナ サテモマア花ニマヨウ事カナ（遠鏡）
- 花に夢中になるといふことだ。「てふ」は、本阿弥切には「といふ」とある。（大系）九九七頁。
- (52) 小島憲之『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』岩波書店、一九七〇年、八六頁。

- (53) 右(52)同、九一頁。
- (54) 前掲(52)同、九三頁。
- (55) 小島憲之『国風暗黒時代の文学』中(中)、塙書房、一九六四年、一三七一頁。
- (56) 右(55)同、一六三六頁。
- (57) 前掲(55)同、一六六六頁。
- (58) 前掲(52)同、二八五頁。
- (59) 前掲(52)同、三〇三頁。
- (60) 前掲(52)同、三二三頁。
- (61) 小島憲之『国風暗黒時代の文学』中(下)I、塙書房、一九七三年、二二一〇頁。
- (62) 小島憲之『国風暗黒時代の文学』中(下)II、塙書房、一九七三年、二七八七頁。
- (63) 小島憲之『国風暗黒時代の文学』下I、塙書房、一九八五年、三〇六四頁。
- (64) 小島憲之『国風暗黒時代の文学』下I、塙書房、一九八五年、三二一〇頁。
- (65) 小島憲之『国風暗黒時代の文学』下III、塙書房、一九八八年、三九七〇頁。
- (66) 渡邊昭宏・宮坂宥勝『三教指歸 性靈集』岩波書店、一九七一年、二五五頁。
- (67) 右(66)同、四六五頁。
- (68) 今浜通隆『本朝麗藻全注釈』三、新典社、二〇一〇年、七頁。
- (69) 右(68)同、九六頁。
- (70) 本間洋一『本朝無題詩全注釈』(一)、一二二頁。
- (71) 右(70)同、四九〇頁。
- (72) 本間洋一『本朝無題詩全注釈』(二)、一七頁。
- (73) 右(72)同、二七頁。
- (74) 川口久雄『菅家文章 菅家後集』岩波書店、一九七一年、一〇七頁。
- (75) 右(74)同、五五一頁。
- (76) 中村璋八・大塚雅司『都氏文集全釈』吸古書院、一九八八年、一七九頁。
- (77) 小島憲之監修『田氏家集注』卷之下、和泉書院、一九九四年、二八、二九頁。
- (78) 右(77)同、二二七頁。
- (79) 前掲(77)同、三八八頁。
- (80) 大曾根章介・金原理・後藤昭雄『本朝文粹』岩波書店、一九九二年、一二九頁。
- (81) 右(80)同、二六三頁。
- (82) 前掲(80)同、三〇四頁。
- (83) 川口久雄『和漢朗詠集』卷上、岩波書店、一九七〇年、六二頁。この詩句の出典は、前掲(80)である。
- (84) 『御堂関白記』「寛弘三(一〇〇六)年三月四日、中略 権中納言輔猷題、渡水落花舞、奏聞後、聞人付韻字、軽字(後略)」(大日本古記録『御堂関白記』上、岩波書店、一九五二年、一七七頁)。
- (85) 『莊子』「齊物論」における「蝶」について、次のようなものである。引用文は、市川安司・遠藤哲夫『莊子』「新釈漢文大系」(明治書院、一九六六年)による。
- 昔者、莊周夢為蝴蝶。栩栩然蝴蝶也。自喻適志與。不知周也。俄而覺、則蘧蘧然周也。不知周之夢為蝴蝶與、蝴蝶之夢為周與。周與蝴蝶、則必有分矣。此之謂物化。
- 先ごろ莊周は蝶になった夢を見た。それはひらひらと飛ぶ蝶で、いかにものびのびとしていたが、自分では莊周であることに気がつかない。ふと目が覚めると、何と自分は莊周ではないか。これはいつたいたい莊周が蝶になった夢を見たのだろうか、蝶が莊周になった夢を見たのだろうか。しかし、莊周と蝶とは、区別があるはずだ。このような変化を物化(物の変化)という。
- 一八五―一八六頁。
- (86) 『全唐詩』(中華書局、一九六〇年)「第三三卷」四五三頁。
- (87) 右(86)同、「第四十卷」五〇五頁。
- (88) 前掲(86)同、「第六三卷」七四三頁。
- (89) 前掲(86)同、「第四三四卷」四八〇四頁。
- (90) 前掲(86)同、「第七八二卷」八八三五頁。
- (91) 前掲(86)同、「第七九五卷」八九五〇頁。
- (92) 前掲(86)同、「第八一二卷」九一四四頁。
- (93) 津島知明・中島和歌子『新編枕草子』おうふう、二〇一〇年。

- 『三宝絵』序に見える。「花」「蝶」は姫宮・若宮（盤）、美麗なものの（田中）。字音語「蝶」和歌は稀。新奇な麦菓子と対応。一三五頁。平安時代では、『枕草子』以後、二箇所「花や蝶や」が見える。一つは『源氏物語』『夕霧』である。（本文は、『新編日本古典文学全集』（小学館）による）「前略」「悲しきことも限りあるを、などか、かく、あまり見知りたまはずはあるべき、言ふかひなく若々しきやうにと恨めしう、異事の筋に、花や蝶やとかけばこそあらめ、わが心にあはれと思ひ、もの嘆かしき方さまのことをいかにと問ふ人は、睦まじうあはれにこそおほゆれ」〔後略〕四四五頁。もう一つは、『堤中納言物語』『蟲めづる姫君』である。（本文は、『日本古典文学大系』（岩波書店）による）「前略」「うらやまし花や蝶やといふめれどかはむしくさき世をも見るかな」〔後略〕三七八頁。
- (95) 吉田幸一・宮田祐行校『三宝絵』東寺観智院本、古典文庫、一九六五年、一五頁。
- (96) 『三宝絵』前田育徳会尊経閣文庫、八木書店、二〇〇七年、八頁。
- (97) 小泉弘・高橋伸幸『諸本対照 三宝絵集成』笠間書院、一九八〇年、五頁。
- (98) 山田孝雄『三宝絵詞の研究』『三宝絵略注』寶文館、一九七一年、四二一～四二二頁。
- (99) 相田満『枕草子』漢故事考——「蒙求」故事とのかかわりを通して——『東洋文化』無窮会、一九九五年、一八一頁。
- (100) 諸本『三宝絵』の注釈では、「花や蝶や」に関する解説は、漢語に関わる説は見えない。主な解釈は、次のようになる。「花や蝶や」と漢語「花蝶」に繋がる説は見えない。
- (1) 山田孝雄著『三宝絵略注』（宝文館）  
男女などに寄つ、花や蝶やといへれば、罪の根、事業の林に露の御心もとどまらじ。（九頁）
- (2) 馬淵和夫・小泉弘校注『三宝絵』（岩波書店）  
男女ナドニ寄ツ、花や蝶やトイヘレバ、罪ノ根、事業ノ林ニ露ノ御心モトドマラジ。（六頁）
- (3) 江口孝夫校注『三宝絵詞』（現代思潮社）  
男女などに寄せつつ花や蝶やと云へれば、罪の根、言葉の林につゆの御心もとどまらじ。（三八頁）

- (4) 出雲路修校注『三宝絵 平安時代仏教説話集』（平凡社）  
男女などに寄せつつ花や蝶やといへれば、罪の根・事業の林に露の御心もとどまらじ。（五頁）
- (101) 本文は『和刻本漢詩集成唐詩』第九輯『白氏長慶集』（汲古書院）により、書き下し文は、『新釈漢文大系』第一二七卷『白氏文集』（二下）（明治書院）に参考した。
- (102) 下定雅弘『白氏文集を読む』勉誠社、一九九六年、一六五頁。
- (103) 下定雅弘『白居易の感傷詩』『帝塚山学院大学研究論集』第二四集、一九八九年、六〇頁。
- (104) 前掲（1）の三巻本に拠る。四三三頁。
- (105) 前掲（101）同。
- (106) 金子彦二郎『増補 平安時代文学と白氏文集』培風館、一九五五年、八三頁。
- (107) 前掲（1）の三巻本に拠る。二〇九～二一〇頁。
- (108) 『日本紀略』本文は、『国史大系 第十一卷 日本紀略後篇・百鍊抄』（吉川弘文館、一九六五年）により、『権記』本文は、『史料纂集 権記第一』（続群書類従完成会、一九七八年）に拠る。ただし、旧字体の表記は新字体に変えた。
- (109) 『学花物語』新編日本古典文学大系（岩波書店、一九九五年）三二六頁。
- (110) 右（109）同、三一七頁。
- (111) 坏美奈子『王朝文学論——古典作品の新しい解釈——』（新典社、二〇一一年）三八九～三九〇頁。
- (112) 『新編国歌大観』には、「萎花蝶飛去」を翻案した歌は、次の三首が見える。
- (A) 三条西実隆『雪玉集』（三〇六五）  
よの中を思ふもかなし花といへどうつれば蝶もすまずなり行く  
（六五二頁）
- (B) 橋千陰『うけらが花』「卷一」「春」（二三三四）  
とぶ蝶のは風にとがはおはじとやうつろふ花を返り見もせぬ  
（四九八頁）
- (C) 香川景樹『桂園一枝』「春」（二二二）  
このさとは花散りたりと飛ぶてふのいそぐかたにも風や吹くらむ  
（六二六頁）

【付記】

本稿は、平成二二年六月二六日 日本文学協会 第三〇回研究発表  
大会 フェリス女学院大学 緑園キャンパス及び平成二四年一月  
一四日、アメリカ東南部アジア研究学会、The Southeast Conference  
of the Association for Asian Studies (SEC/AAS) に於いて、口頭発表に  
基じて書いた小稿である。当時、三田村雅子先生、津島知明先生、  
Ronald Green先生などの多くの先生方から、ご教示を賜り、御厚意に  
心より感謝を申し上げたい。



# The Expression of Chinese in The Pillow Book

## The Section of “When the Empress Was Staying in the Third Ward”

ZHANG Peihua

The Graduate University for Advanced Studies,  
School of Cultural and Social Studies,  
Department of Japanese Literature

Fujiwara Shōshi (988–1074) became the new empress (*chūgū*) of the Emperor Ichijō (980–1011) on February 25, 1000, and Fujiwara Teishi (977–1001), who had previously been *chūgū*, was designated *kōgō* (also translated as empress, but the title indicated a diminution of imperial favor in this instance). Teishi then moved into the Third Ward, where, after giving birth to the third princess, she passed away on December 16, only twenty-five years old (*Nihon kiryaku*).

The section of “When the Empress Was Staying in the Third Ward” is a narration about the festival of the Fifth Day of the year 1000, when the first Princess Shōshi was five years old and the second Prince Atsuyasu was two years old. On this day there were some festive things such as herbal balls which were presents from the Palace. Notably, there was something called an *aozashi*. Sei Shōnagon picked it up, placed an elegant cover on it, and presented it to Empress (*kōgō*) Teishi. Teishi, who was three months pregnant, perceived what Shōnagon meant to convey, received the *aozashi* and quickly composed a splendid poem in response, using the phrase “hana ya chō ya”: “Even on this festive day, when all are seeking butterflies and flowers, you and you alone can see what feelings hide within my heart.”

This clearly dated passage is regarded as quite important, and it has been discussed by many scholars. However, some problems of interpretation remain unresolved. Firstly, what is the meaning of the word *aozashi*? Secondly, from the Nara period to the Heian period, there were only a few waka which used the word butterfly, so what feelings were hidden by Empress Teishi between the “flowers and butterflies”? This essay suggests that the answers to these questions can be discovered in the influence of ancient Chinese expressions.

**Key words:** Ancient Chinese Festival of the Fifth Day, *Aozashi*, *Hana ya chō ya*, *Collected Works of Bai Juyi*, Sentimental poetry